

④以上常識的に考えてみて、今日は神の死滅即ち、命令者不在の時代ということが出来そうだ。さて絵画の世界はどうなっているのだろうか。絵画とて、人間精神の一産物であってみれば、諸情勢の変化を受けざるを得ないだろう。絵画がより間接的なもの、即ち二次産物的性格において、権力の側に奉仕する形をとったにすぎなかったことは、「英雄たちの大集会のための九州派会合の通知」でも述べたように明らかだ。その点、権力側に奉仕するといった面では、ブルジョア、プロレタリアの差別は全くないのが現状ではなかろうか。

A、差別がないと判定したのは、事実、形の上からみても全く同様ではないか。例えば資本主義国の画家のタブロも平面であり、原画一点であり、それ以上に、その原画を予定せざる誰かの室に、あるいは贈答品の一種として、または地方の有力者の紹介で公民館の壁に掛けるか、壁画を描くか、あるいは都庁に。その個人的閉鎖的経由は、社会主義国も同様だろう。

ちょっとその物差しが「人民の」といった、実にいいかげんの広告めいだけで絵が売れてゆく経路は、全く同じなんだと判断していいのではないか。だからこそ、時代、あるいは神、例えばユダヤ教、回教、仏教といった具合に、人間の欠陥種類に応じた神々の変化があつたにもかかわらず、資本主義と社会主義の絵が同質であることがオカシイ。その意味はフルシチョフがいうように、オカシイということでは同質だが、私が使用する意味は全く逆で、抽象、具象といっても、実作者側からみて現在の絵画では意識的開き、あるいは落差はないということだ。その現実的証明として、どちらも同じ画商が扱い、同じ団体に同居し、同じ人間が具象を描き、抽象を描くようになって来たにすぎないという事実から、平和展のアカハタの絵も、日展の具象も、二科の抽象も、ソ連の絵も全く同質のものだ。社会体制が違うにもかかわらず、キリスト教から回教、あるいは仏教に転宗するような苦しみもなく、容易に、こんなことを描いている私自身すらソ連のような平和展のような、日展のような、二科のような——それぞれの絵を描くのに、権力に抵抗するような障害がないのが残念でたまらないが、容易に描きこなせることを告白すればことたりることで、すべての画家に、この傾向はあるというのが常識である。

B、その辺の事情の真の意味は判らないが、その辺の事情めいた性格を指令して来た主人公は、流通体制としては、益々強固な制度となろうが、それこそ先にも述べたような真の意味での主人公は死滅してしまったのだ。それはちょうど公娼廃止に似て、人前ではやらぬが、従来どおり女としての機能と基盤である生活の方法が変らぬかぎり、私娼として自由に個人企業に移るよう、よくても悪くても、自ら貧しくても責任を負うよう、意味としては少々違うが、絵を描いていた職人どもが、主人の死によって職人みずからの絵を描かなくてはならないハメにおちいったようなものだ。勿論、どちらが優れているかなど、優劣を競う性質

のもので はないらしい。

C. さて、例が適当でないのだが、そろそろ結論めいたことを述べよう。神々が死滅する前まで、神々が健在である場合、絵画は他のジャンル (文学、哲学) 以上に装飾品である弱味を背負い、他のジャンルから表現をかり、時の権力者から指令されて、職人的階級として発達して来たのが絵画の歴史ではなかったか。それが、主人公が死滅した今日、例えば米ソが核停で全力をつくす道理、一体、どの時代に「核停」原因不明の協定が成立した時代があったろうか。先にも述べたように、命令者不在の時代にほかならないのだ。